

2008年10月25日発行  
第1巻 第4号  
2008年11月号



ナショナル  
ジオグラジャップ  
日本版

# NATIONAL GEOGRAJAP



## 日本にもあった パラミータ文明

世界各地で見つかるパラミータ文明の痕跡  
銀色のナメクジ ツチノコ発見 吉祥寺のお茶の水



# PLANET DARK

西暦 2008 年 11 月 1 日

その未知なる姿、ここに出現

@ [GAS] guild-unit art space

## 銀色に輝く新種のナメクジ発見



長野県大町市美麻の個人宅で、新種のナメクジが発見された。発見者によってナメナメクジと名づけられたこのナメクジは、室内のテーブルにおいてあった鹿革の上に集まっていたという。銀色に輝く身体は体長は4～6センチ程にもなる。ナメクジやカタツムリの仲間は歯舌とよばれる舌を持っているが、ナメナメクジは哺乳類と似た柔らかな舌を持ち、鹿革をなめていたらしい。

現在、その生態を研究している吉祥寺大学の一井長馬准教授は「まるでシルバーアクセサリのような。銀色の身体はナメクジとは思えないほど硬く、ほとんど動くことがないので、生態がまったくつかめない」と嘆く。

ナメナメクジの発見に沸き立つ美麻では、ナメナメクジ飴が発売され、観光客の人気を集めている。本物がアクセサリとして売られてしまってもわからないかもしれない。

### 読者の皆様へ

©JAP Inc.

●「ナショナル・ジオグラフィック」の内容はすべて、架空のものです。実在する団体、個人とは一切関係ありません。

●「ナショナル・ジオグラフィック」の内容の全部、または一部を無断で他のメディアに転載することを禁じます。著作権はすべてJAP工房に帰属します。

●参考文献：「日本文明の謎を解く」（清流出版刊）、「文字の起源と歴史」（創元社刊）、「消えた古代文明」（講談社刊）、「古代遺跡ミステリー」（教育社刊）、「超古代オーバーチュアFILE」（学習研究社刊）、「世界の宗教 101 の謎」（河出書房新社刊）、「図解 曼荼羅大全」（東洋書林）

●Photo Jap-Inc, Studio Zimp, Yukio Isogai, Osiris Express (<http://www.osiris-express.com/index.html>)

# Eternal

永遠の時  
永遠の未来  
永遠の幸福

それぞれの思い

この秋、新発売  
... エターナル・バーバラ

## 幻のツチノコを発見？

1970年代に幻の生物として騒がれたツチノコ。北海道と南西諸島以外の日本各地で目撃されながらも、未だにその正体ははっきりしていないが、意外な場所でツチノコの標本が保管されていることを知った。

都内某所で営業するバーの棚に、ウィスキーの瓶と一緒に並べられた密閉容器。ホコリをかぶり無造作におかれ

ていたそれは、ある学者から20年ほど前に預かったものらしい。結局その学者は消息を絶ってしまい、ホルマリン漬けのツチノコは行き場を失ってしまったのだ。バーのマスターはその学者からの連絡を期待して、ナショナルジオグラフィックでの公表を決意した。果たしてこのツチノコが再び公の場に姿を現す日はくるのだろうか？ マスターは「預かり物だから」と自らが再び公にすることはないと語っている。



## 吉祥寺にあるお茶の水

「お茶の水」といえば東京の千代田区神田にある駅名。二代目将軍・徳川家忠がその地にあった湧き水をほめ、お茶用に献上したことが由来だ。だが後に神田川が拡張した際にその名水は流れに没してしまった。そこから東へ15キロほど西へ向かった吉祥寺市にある井の頭公園内にも「お茶の水」がある。ここは徳川家康が狩に来た際にお茶をたてたといわれている清水だ。だが、こちらのお茶の水も現在では天然の湧き水ではなく、地下からポンプで汲み上げているのだという。



日本にもあったパラミータ文明

# 世界各地で見つかる 超古代文明の痕跡

ネバダ砂漠から世界へ———。  
北アメリカ大陸で発見された  
超古代文明の衝撃は  
世界中へ広がろうとしている。  
これまで考古学上、または人類学上、  
その存在の説明がつかなかった  
いわゆる“オーパーツ”が  
実は1つの文明の  
遺物である可能性が  
出てきたのだ。  
パラミータ文明解明の  
第二章がはじまった。



インドネシアのジャワ島の  
仏教寺院に伝わる銀製の  
指輪。リングの中央に  
ある円形状のパーツがネ  
バダの遺跡から出土した  
円錐ピラミッドと酷似し  
ている。中央に埋め込ま  
れたルビーも同じ。寺院  
の説明によれば、この円  
錐はボルブドゥール遺跡  
などのストゥーパ（仏塔）  
を模したものだという説  
と、指輪の円錐を模して  
ストゥーパが作られたと  
いう説がある。紀元前7  
～8世紀頃から指輪が伝  
えられているという言い  
伝えがあり、もしそれが  
本当であれば、後者の説  
が正しい。



## 世界各地で見つかる類似品

日本、スペイン、ペルーの合同発掘研究チームが、アメリカ西部のネバダ州で約1万4000年前の紀元前1万2000年頃に作られた住居跡と遺物を発見した。これまでの文明史の常識をくつがえし、文明の起源を解明する上で極めて重要なこの発見のきっかけは、今から150年ほど前の1852年にスペインの考古学者、シウダッド・コンダル (Ciudad Condal) が研究論文の終章「El Planeta Paramita」で、紀元前1万5000年前の超古代文明、“パラミータ文明”の存在を唱えたことにさかのぼる。

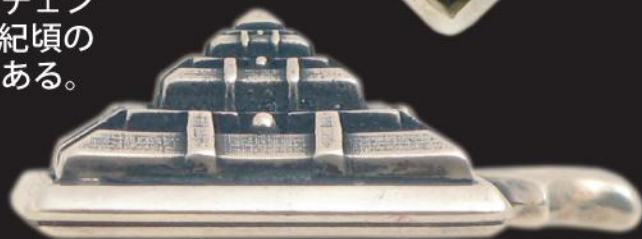
コンダルが書き残した「El Planeta Paramita」によれば、エジプトやインドス、アステカ、マヤ、インカ、すべての文明の起源がパラミータ文明だ。もしそれが事実で、ネバダの古代文明がパラミータ文明であるならば、世界のあらゆる文明は北アメリカ大陸から広まっていったことになる。

残念ながら発掘はアメリカ政府の不可解な介入によって中止に追い込まれてしまい、ネバダの遺跡がパラミータ文明だという確証を得るまでには至らなかった。

発掘はアメリカ単独の調査チームへ引き継がれたが、事実上、発掘は中止された。現在、発掘現場は立ち入り禁



ネバダの遺跡から出土したものとまったく同じピラミッド状をしている銀製装飾品。以前、ナショナル・ジオグラフィックではテオティワカンの月のピラミッドとの類似性を指摘したが、今回それに近い位置にあるチチェンイツァ遺跡でこのピラミッド状装飾品が出土していたことが判明した。チチェンイツァには、9～13世紀頃のククルカン・ピラミッドがある。





クスコ国立博物館が所蔵する「インカマンコの秘宝」。インカ帝国最後の王であるインカマンコの末裔を名乗る人物が近年になって同博物館に寄贈したが、詳細は不明。指輪とブレスレットの対だが、ブレスレットの一部にネバダで発見された銀製装飾品と同じ意匠が見られる。



ネバダ砂漠で発掘された紀元前1万2000年の銀製装飾品。同じ意匠を持った古代の銀製装飾品が世界各地から報告された。





カンボジアの仏教寺院に伝わる銀製装飾品。「アンモライト」と呼ばれる、オパールのような輝きを持つアンモナイトの化石に、銀とオパールの装飾が施されている。留め具らしきパーツがネバダで出土した銀製装飾品と酷似。元はシヴァ神を祀るバクセイ・チャンクロン寺院のものだったと伝えられている。バクセイ・チャンクロン寺院には984年に建立されたピラミッド形状の遺跡がある。

止となり、遺跡は埋め戻されている。隣接するネバダ核実験場からの影響を理由とし、遺跡保全のために埋め戻されたという発表だが真相は闇の中だ。臨界前核実験しか行われていない核実験場から一体どんな影響があるというのだろうか？

ここで発掘中止の理由を詮索しても状況は変わらない。合同発掘研究チームがそうであるように、残された資料と新たな研究でネバダの古代文明、そしてパラミータ文明の謎を解き明かしていくことが重要だ。

幸いにも事件をきっかけにして、ネバダでの古代文明発見は、世界中の人々に知れ渡ることとなった。そして合同発掘研究チームのもとにさまざまな情報が寄せられたのだ。

「ネバダの古代遺跡は世紀の大発見だと思っていたんだが、仮説の部分も多くあって、あまり大きなニュースとしては扱われていなかった。文明史を塗り替えるような発見だからね、メディアも慎重になっていたんだろう。ところがあの発掘中止事件をきっかけにして世界中に知れ渡ったんだ。おかげで世界各地から出土物の類似品が報告されてね。今ではアメリカ政府に感謝さえしているよ」。

合同発掘研究チームのリーダー、ウロボン・イマカワックの言葉は皮肉混じりに聞こえるが本心でもあるだろう。ネバダで発掘された銀製装飾品に類似したものが、オーパーツとして世界各地に存在していたのだ。



ネバダで出土した円錐ピラミッドの裏側に刻まれた図形。円盤文字にも同じような図形が彫られている。図形自体はそれぞれ異なっているが構成要素がよく似ている。



阿蘇泉神社の祭神として祀られている全高約35ミリの阿塑神像。縄文晩期の遮光器土偶とよく似ているが、縄文時代の遺跡からこのような大きさ、材質で作られた像は出土していない。注目すべきは腹部に見られる円形の装飾。ネバダの円盤文字の裏面、円錐ピラミッドの裏面と共通する意匠が見受けられる。右目と腹部に種類の異なる金属の珠が埋め込まれているが、右目の珠は金、腹部の珠は銀と思われる。金、銀、謎の赤い金属の3つの金属で作られていることにも何らかの意味があるのかも知れない。

## 日本にもあったパラミータの痕跡

ネバダの出土物との関連性をもつもののほとんどが銀製だったというのはとても興味深い。そんな中でウロボン・イマカワック (Urobon Imakawak) が興味をひいたのは、日本の神社が祀っている小さな祭神だ。

九州、阿蘇山の麓にある阿蘇泉神社に伝わる祭神はわずか35ミリほどの像だが、神社の記録によれば3000年以上前から存在しているという。

「この神社はもともと阿塑 (おそ) 神社といい、阿塑神様を祀るために建立されました。神社に残っている記録だけでも3000年以上前から伝わるとされています」

「阿塑」の「塑」とは土人形のこと、この像が陶器製だと勘違いされていたからだ。確かに陶器にも見えるが、近年の調査で金属製であることが判明している。しかしこの赤い金属がどのような種類のものなのかは、詳しい調査が行えないため謎。サンプルを取るために祭神を傷つけることを神社が拒否しているからだ。

U・イマカワック達が最も注目したのは胸の中央に埋め込まれた小さな珠を中心に施されている意匠だ。

「ネバダの円盤文字の裏側に刻まれた記号や、円錐ピラミッドの形をした銀製装飾品の裏に刻まれている記号と、構成されている要素がとてもよく似ていますね。似ていると言うより、同じものだと言ってもいいでしょう。阿塑神像は縄文時代の遮光器土偶と同じ形状的特徴を持っていますが、その多くは東北地方から出土しています。まさか九州にこのようなものが存在するとはまったく知りませんでした」

ユウ・コンダル (Yu Condal) は自分が研究拠点としていた国でこのような発見があったことに驚く。しかし無理もない。この阿塑神像は阿蘇泉神社の宮司だけが12年に1度だけ拝謁を許される崇高な神なのだ。



世界最大級のカルデラを持つ阿蘇山の外輪山麓にある阿蘇泉神社。現在は阿蘇神社の日本全国に400社以上ある分社の1つだが、歴史は阿蘇神社よりも古く、この地に「阿蘇」という名が付く以前からあった。

## 果たしてパラミータ文明なのか？

世界各地で見つかるネバダの古代文明との関連性。それまで謎とされ点でちらばっていたものが、同じ文明の遺物として線で繋がりがつつあるのは間違いない。まだどれも資料が極めて少なく、またあまりにも広く世界に分布しているために、どのような繋がりがあるのか判然としないが、解明されるのは時間の問題だ。

もはやこのネバダの超古代文明が、シウダッド・コンダルが唱えたパラミータ文明だというのは間違いがないだろう。パラミータ文明は銀を崇めたと彼がいうように、見つかった遺物の多くは銀製だ。一方でC・コンダルさえも知り得なかった新しい発見もあった。日本で見つかった赤い謎の金属だ。これはパラミータ文明から伝来したものなのか、それとも古代日本の技術なのか。さらなる情報が世界から寄せられることに期待したい。



## NEXT ISSUE

「NATIONAL GEOGRAJAP 1月号」は、  
12月下旬公開予定。  
パラミータ文明の真相に迫ります！

『NATIONAL GRAJAP』にご意見、ご感想をお寄せください。

[grajap@live.jp](mailto:grajap@live.jp)